

3.4 冬季

3.4.2 質量濃度及び組成

(1) 測定値の妥当性の検証

①イオンバランスの確認

図 3-4-1 に、調査期間中の各地点の各日のデータから求めた陽イオン (Na^+ 、 NH_4^+ 、 K^+ 、 Ca^{2+} 、 Mg^{2+}) 及び陰イオン (Cl^- 、 NO_3^- 、 SO_4^{2-}) それぞれの合計当量濃度の比較を示す。データの取り扱いは春季 (3.1.2 (1)) と同様である。陰イオン当量濃度合計/陽イオン当量濃度合計は概ね 0.8~1.2 に収まっており、全 331 データ中、29 データが 0.8 未満であった。富士については測定期間の全てが 0.8 未満であった。また、1.2 を超過したものは川崎市の 1/29 のデータ 1 つのみであった。

②マスキロージャーモデルによる検証

図 3-4-2 に、調査期間中の各地点の各日のデータから推定した質量濃度と、標準測定法による質量濃度の比較を示す。推定式とデータの取り扱いは春季 (3.1.2 (1)) と同様である。標準測定法による質量濃度に対する推定質量濃度の比は 329 データ中 0.8 未満が 3 データ、1.2 を超過したものが 69 データであった。標準測定法による質量濃度が低い ($5 \mu\text{g}/\text{m}^3$ 未満) 日は、329 データ中 25 データが該当し、10 データが 1 月 25 日であった。比が大きく、分布からのずれがあったのは、1 月 18 日、22 日、27 日の大和、1 月 27 日の富士であり比が小さく、分布からのずれがあった地点ほとんどなかった。

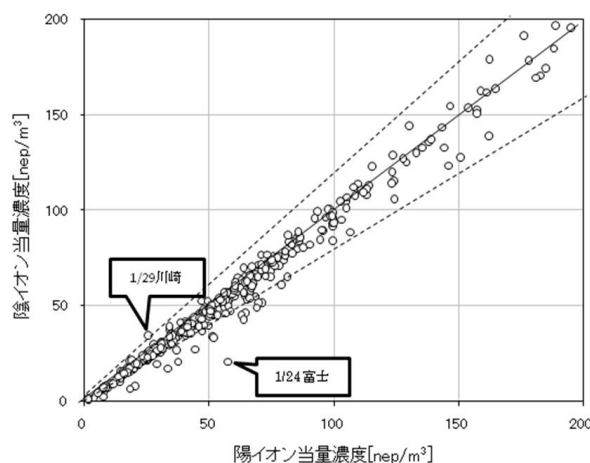


図 3-4-1 イオンバランス

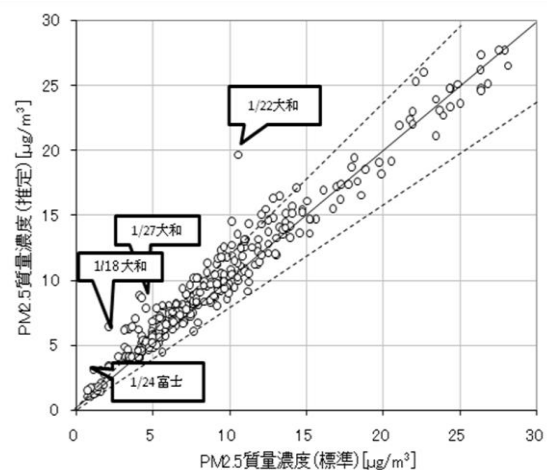


図 3-4-2 マスキロージャーモデル

(2) 季節平均濃度と組成の分布

図 3-4-3 に、調査期間中の各地点の PM2.5 平均濃度を地図に示す。また、一部の地点については、PM2.5 主要成分 (イオン成分、炭素成分) の組成を円グラフに示す。PM2.5 平均濃度が、 $15 \mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えた地点は、真岡であった。平成 30 年度の冬季と比較すると、甲

府、前橋、鴻巣以外の地点では減少していた。

主要成分組成は、全体的に NO_3^- 、 SO_4^{2-} 、 NH_4^+ の 3 つのイオン比率が拮抗する傾向となっているが、長野、静岡、浜松、富士、勝浦は NO_3^- と比較して SO_4^{2-} の割合が高い傾向がみられた。また、富士は最も SO_4^{2-} の濃度が低かった（絶対値での比較）。OC については、土浦、富士が全地点平均値と比べ多い傾向がみられた。EC については、全地点平均値と比べ、千葉、大和、大月、富士、静岡、で低い傾向がみられた。

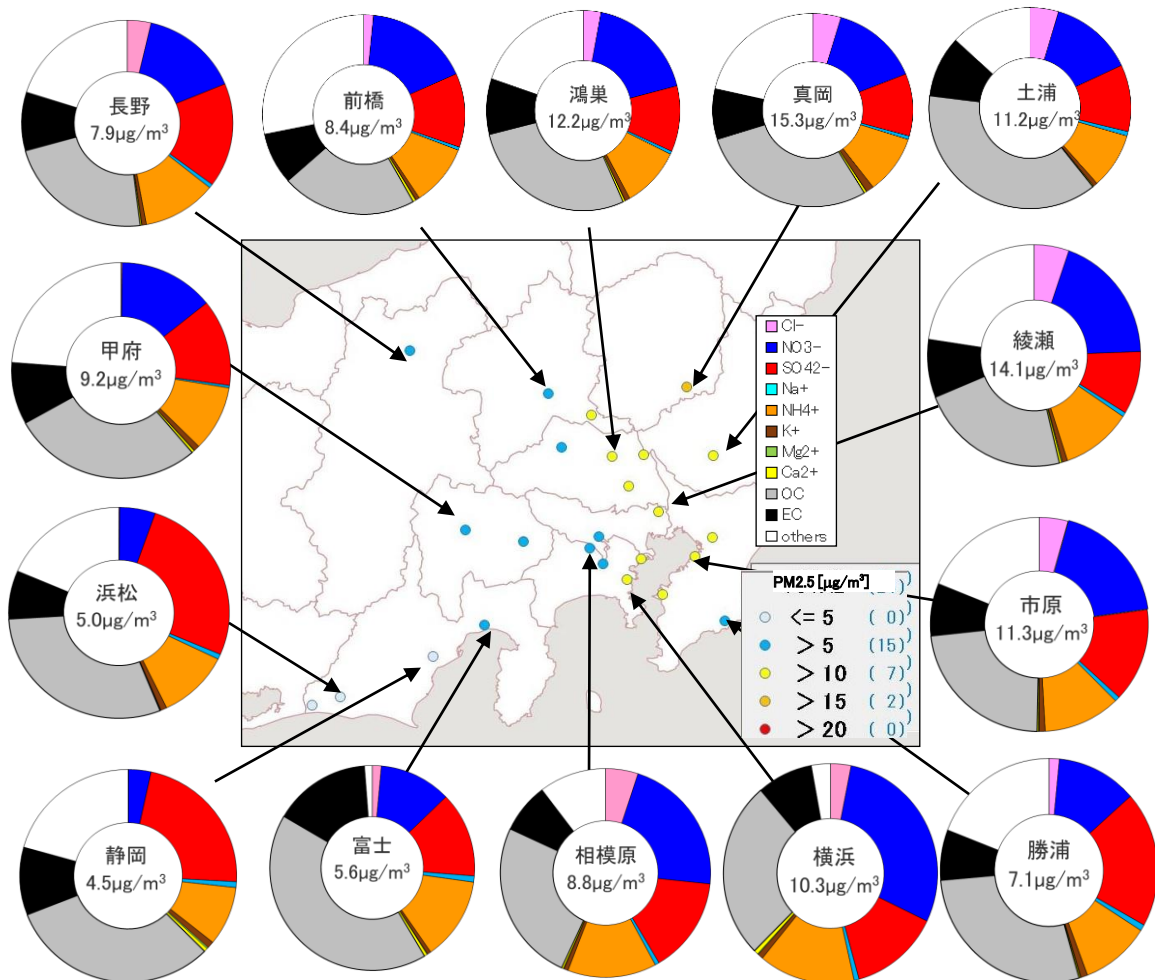


図 3-4-3 PM2.5 平均濃度(地図)と PM2.5 主要成分組成(円グラフ)

3.4.3 水溶性イオン成分濃度

図 3-4-4 に、調査期間中の SO_4^{2-} 及び SO_2 の平均濃度分布を示す。 SO_4^{2-} は前橋、富士、静岡で比較的低い傾向にあったが、平成 30 年度ほど各地点で特色のあるばらつきはみられなかった。 SO_2 は東京湾周辺（相模原、横浜、富津）でやや高い傾向が見られた。図 3-4-5 に、調査期間中の NO_3^- 及び NO_x の平均濃度分布を示す。 NO_x は沿岸部を中心に全体的にやや高い傾向が見られた。 NO_3^- は、真岡、太田、鴻巣、幸手、さいたま、市原、富津、千葉、綾瀬、横浜でやや高く、PM2.5 の濃度分布と似た傾向が見られた。図 3-4-6 に、調査期間中の Cl^- の平均濃度分布を示す。 Cl^- は、低温になる冬季には粒子成分として捕捉されやすく、関東の中部及び東部地域の地点で $0.4 \mu\text{g}/\text{m}^3$ より高くなった。図 3-4-7 に、調査期間中の K^+ の平均濃度分布を示す。 K^+ は真岡、幸手、綾瀬が比較的高い結果となった。

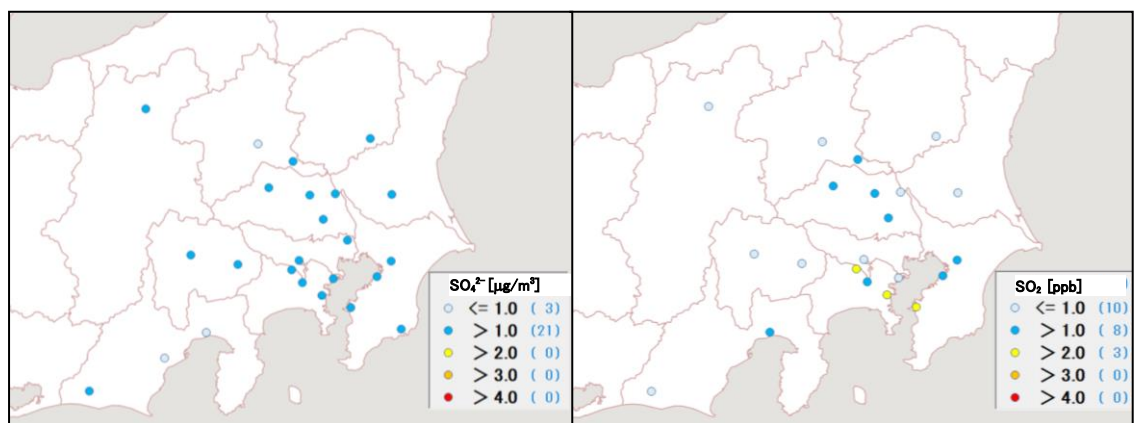


図 3-4-4 SO_4^{2-} (左)及び SO_2 (右)の平均濃度分布

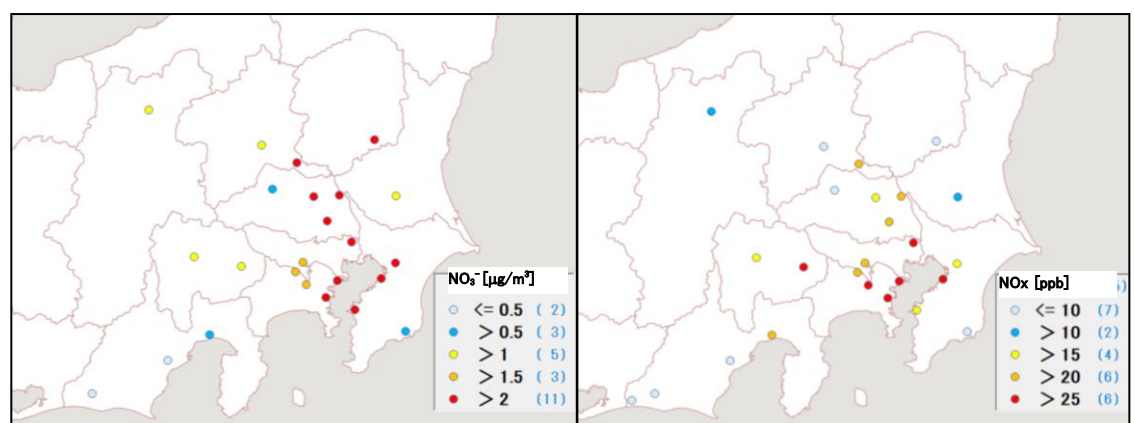


図 3-4-5 NO_3^- (左)及び NO_x (右)の平均濃度分布

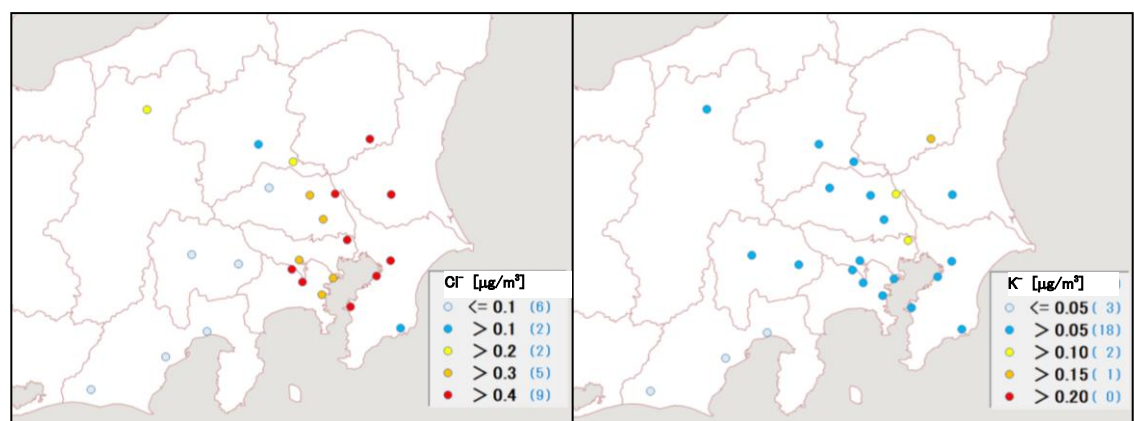


図 3-4-6 Cl^- の平均濃度分布

図 3-4-7 K^+ の平均濃度分布

3.4.4 炭素成分濃度

図 3-4-8 に、調査期間中の EC 及び OC の平均濃度分布を示す。EC で $1\text{ }\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えた地点は、土浦、太田、真岡、鴻巣、幸手、千葉、綾瀬の 7 か所であった。OC は土浦、真岡、が $4\text{ }\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超え、太田、鴻巣、幸手、さいたま、千葉、綾瀬で $3\text{ }\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超える値となった。図 3-4-9 に、調査期間中の WSOC 及び Ox の平均濃度分布、図 3-4-10 に OC に占める WSOC の割合 (WSOC/OC) 及び TC に占める OC の割合 (OC/TC) の分布を示す。WSOC については、真岡、富津、千葉が比較的高い傾向にあった。Ox は 35 ppb を超えた地点はなく濃度差は小さかった。WSOC/OC については市原、富津、千葉以外はおおむね 70% 以下であった。OC/TC は勝浦、浜松以外で 60%～80% の範囲に収まり、比率の差は小さく顕著な傾向は見られなかった。図 3-4-11 に、調査期間中の NMHC の平均濃度分布を示す。NMHC はさいたまの 0.19 ppmC が最も高かったが、顕著に高い地点はなかった。図 3-4-12 に OC と Ox 及び OC と NMHC の関係を示す。OC と Ox の関係及び OC と NMHC では相関が認められなかった。図 3-4-13 に、OC と K^+ 及び WSOC と K^+ の関係を示す。OC と K^+ 、WSOC と K^+ とともに相関があった。図 3-4-14 に、char-EC と K^+ の関係を示す。char-EC と K^+ の相関は認められなかった。平成 30 年度と同様 OC と Ox には相関が認められず、冬季については光化学二次生成の寄与は小さいことが示唆された。

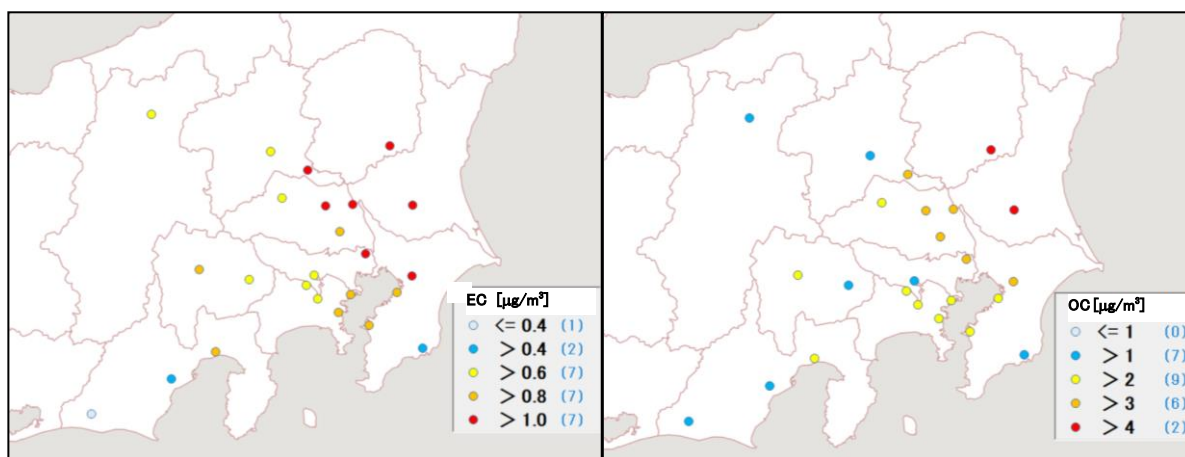


図 3-4-8 EC(左)及び OC(右)の平均濃度分

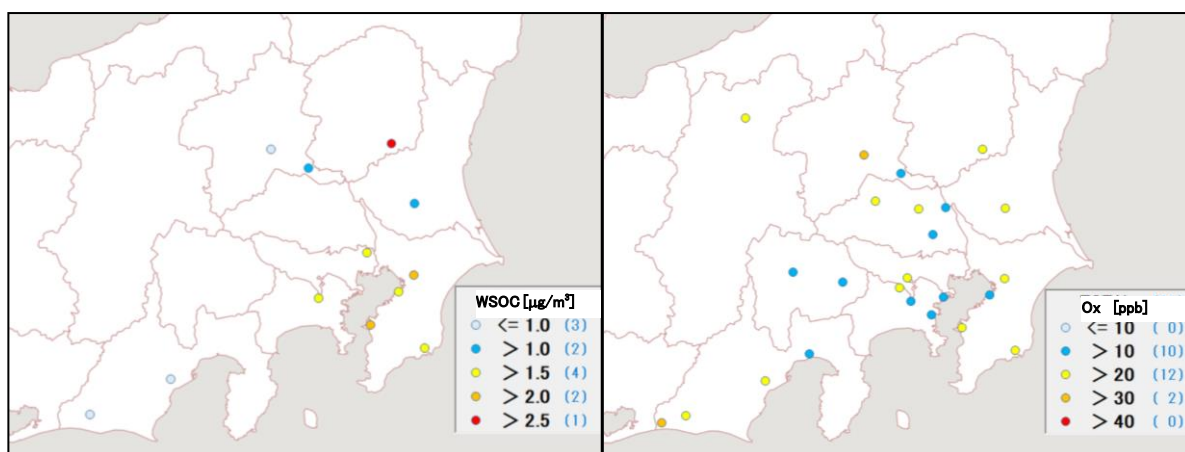


図 3-4-9 WSOC(左)及び Ox(右)の平均濃度分布

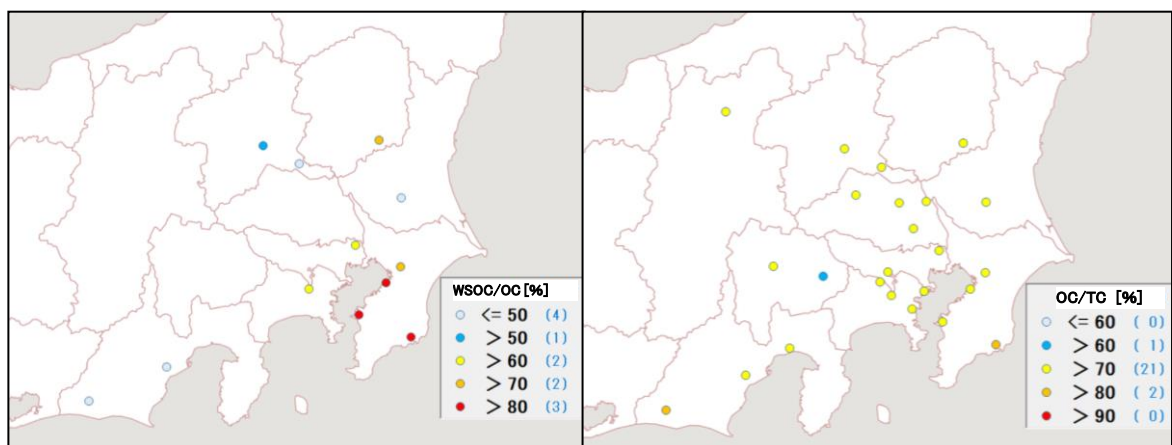


図 3-4-10 WSOC/OC(左)及び OC/TC(右)の平均分布

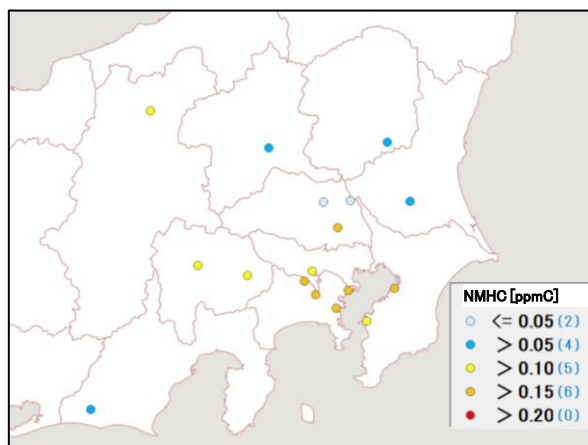


図 3-4-11 NMHC の平均濃度分布

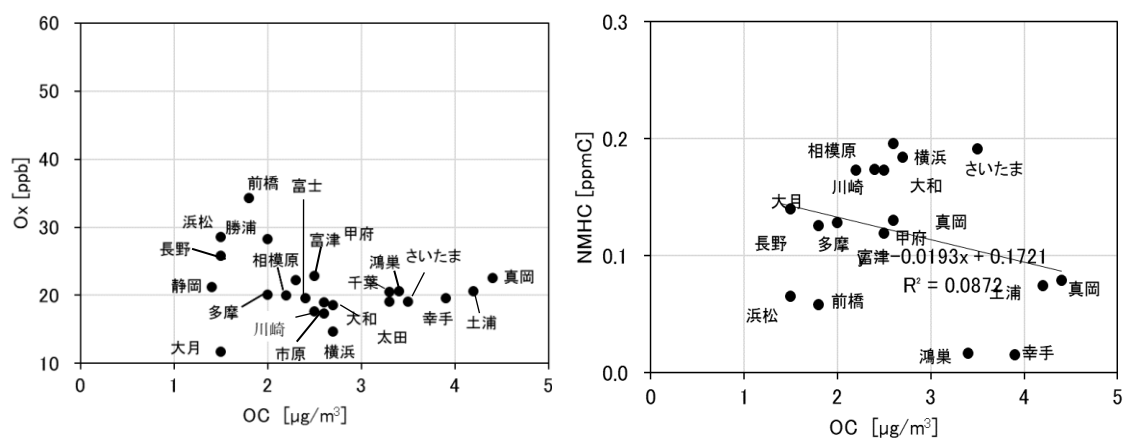


図 3-4-12 OC と Ox(左)及び OC と NMHC(右)の関係

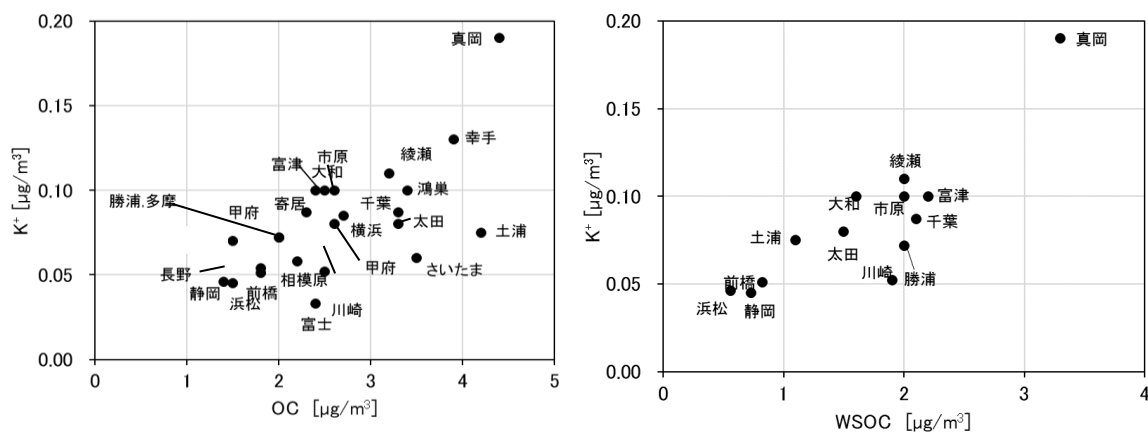


図 3-4-13 OC と K^+ (左) 及び WSOC と K^+ (右) の関係

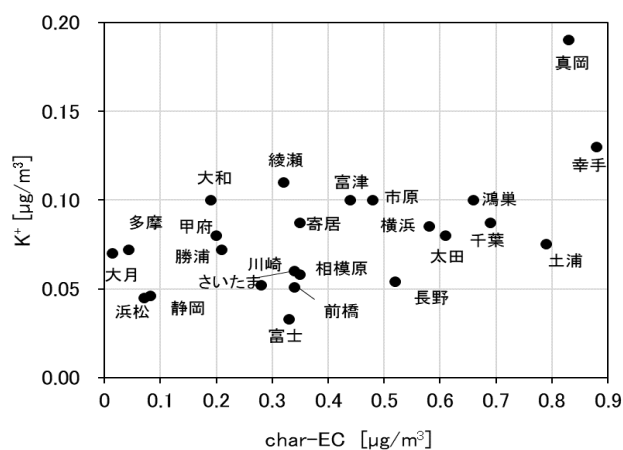


図 3-4-14 char-EC と K^+ の関係

3.4.5 無機元素濃度

図 3-4-15～28 に、ナトリウム (Na)、アルミニウム (Al)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、バナジウム (V)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ニッケル (Ni)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、鉛 (Pb) の平均濃度分布をそれぞれ示す。V、Cr、Mn、Fe、Cu、Zn は沿岸部や都市部などで相対的に高い傾向が見られ、工業活動や都市活動との関連が示唆される。As は地域的な差は小さく顕著な傾向は見られなかったが、令和元年度は千葉が比較的高かった。Al、Ca については、平成 30 年度に比較的高値であった東京湾周辺は、令和元年度は高値を示さなかった。これは、平成 30 年度冬季の降水量が非常に少なかったため乾燥し、土壌粒子の巻き上げがあったものと推察される。

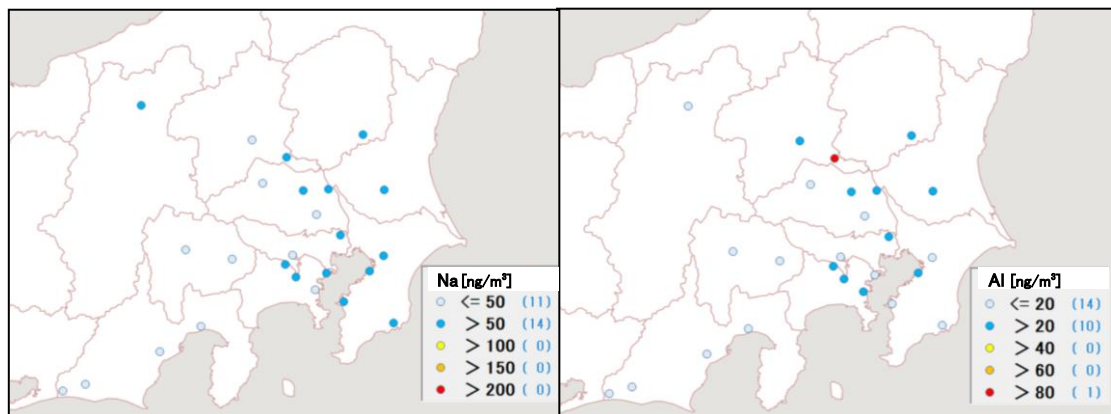


図 3-4-15 ナトリウムの平均濃度分布

図 3-4-16 アルミニウムの平均濃度分布

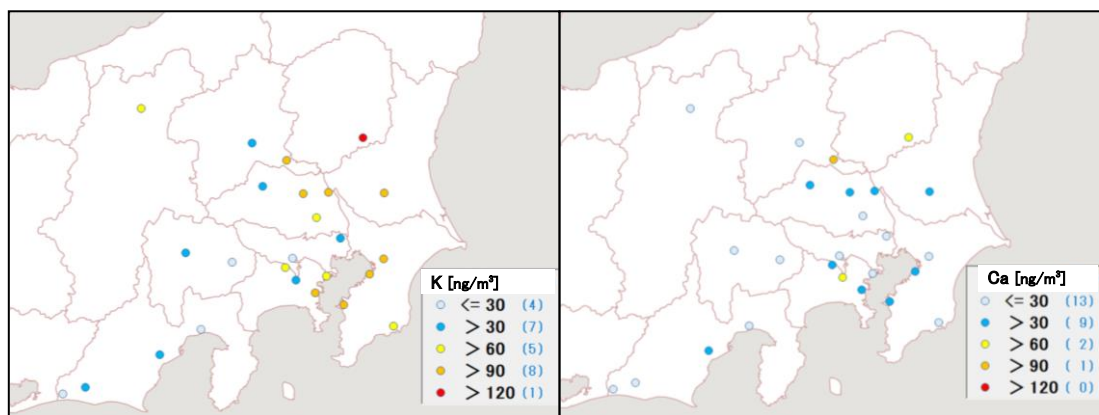


図 3-4-17 カリウムの平均濃度分布

図 3-4-18 カルシウムの平均濃度分布

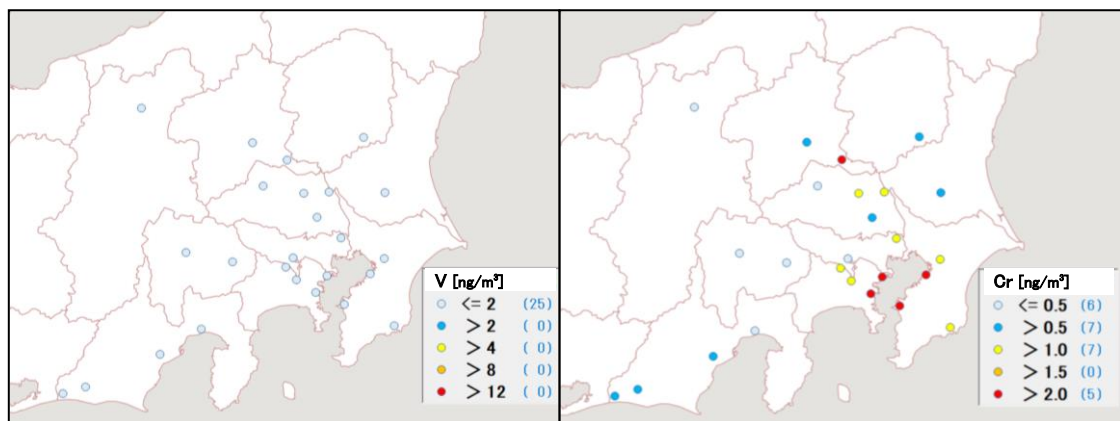


図 3-4-19 バナジウムの平均濃度分布

図 3-4-20 クロムの平均濃度分布

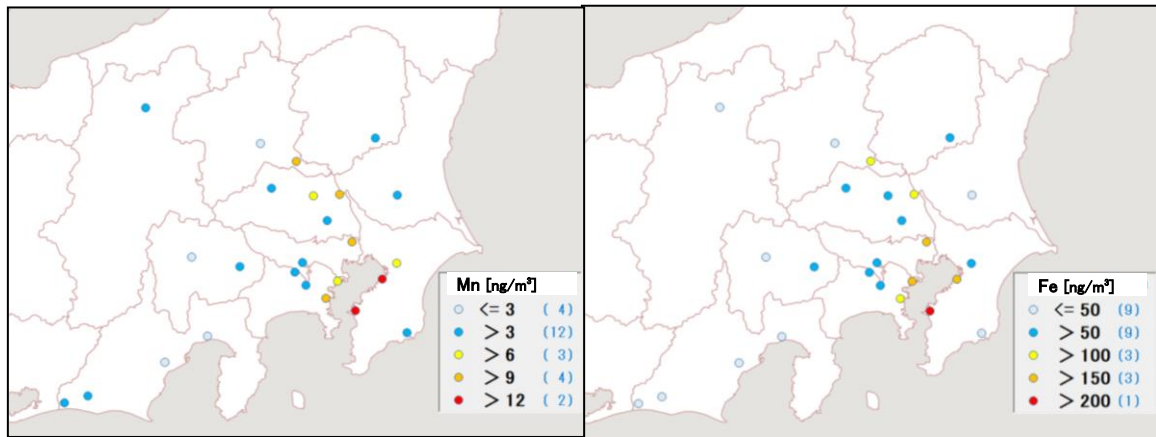


図 3-4-21 マンガンの平均濃度分布

図 3-4-22 鉄の平均濃度分布

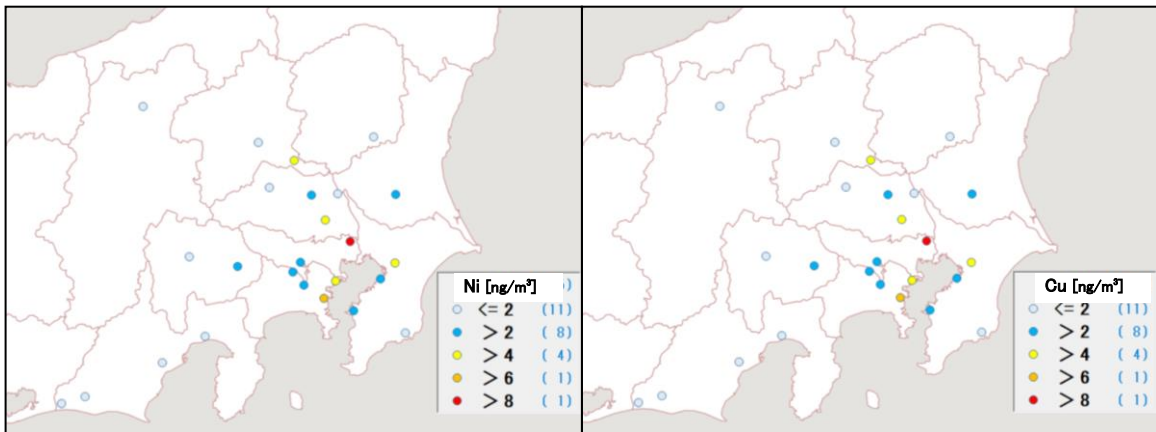


図 3-4-23 ニッケルの平均濃度分布

図 3-4-24 銅の平均濃度分布

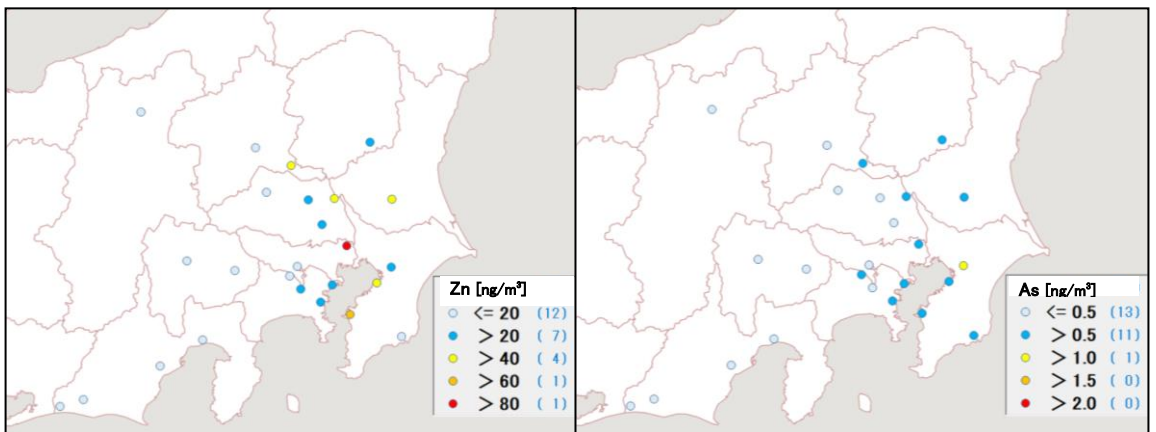


図 3-4-25 亜鉛の平均濃度分布

図 3-4-26 ヒ素の平均濃度分布

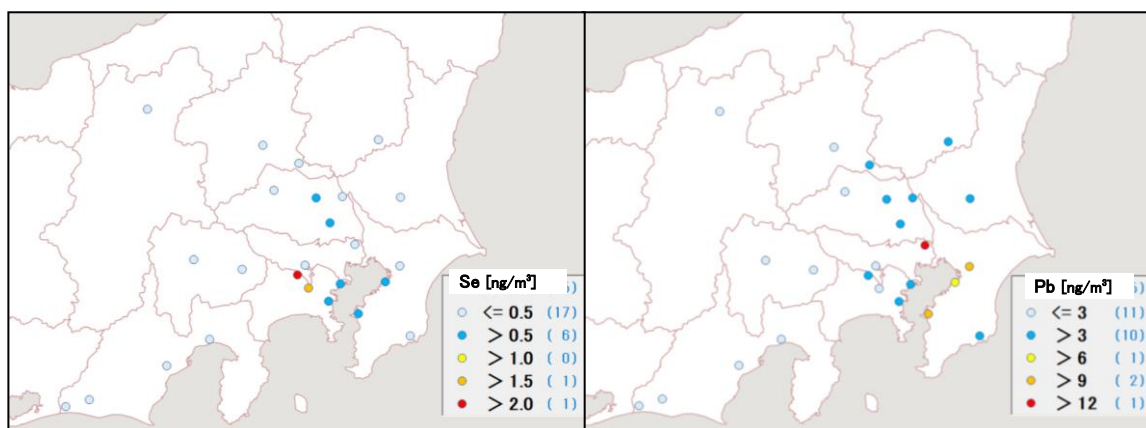


図 3-4-27 セレンの平均濃度分布

図 3-4-28 鉛の平均濃度分布